



本丸御殿上段ノ間

9 本丸御殿など

本丸には天守閣・本丸御殿・納戸蔵・廊下門・東多間・西多間・黒鉄門などの建造物が残る。現存十二城のなかでも、本丸御殿を残すのは高知城のみで、いずれも国の重要文化財に指定されている。東多間は武器庫、西多間は本丸警護の武士の番所、納戸蔵は藩の重要書類の収蔵、黒鉄門は儀式の際に藩主が出入りするの用にいられた。御殿の書院は正殿、溜ノ間、玄間からなり、正殿には一段高とした上段ノ間があり、西側には武者隠しがある。欄間は土佐の荒波を表現したものになっている。創建当初の御殿は金箔張の襖など贅を尽くしたものであったが、再建時には全体に質素な造りになったという。

8 天守閣

外観四重(内部3層6階)高さ18.5mの望楼型天守で、創建当初の様式を踏襲して1749年に再建された。大入母屋とその上の唐破風、黒漆で塗られた高欄が特徴的で、1階北東角には現存するものとしては全国唯一の忍び返しもある。

◎ 本丸への順路

- まっすぐルート**
追手門～本丸まで約8分。急な階段が続きますが、最も早く本丸に到達することができるルートです。
- ゆったりルート**
杉ノ段から梅ノ段、三ノ丸を経由。あまり知られていない城の風景を楽しめます。追手門～本丸まで約20分。



1 追手門

石垣の上に渡櫓を載せた櫓門で、城の大手(正面)にふさわしい堂々たる構えを持つ。門前は枳形になっており、防御時には石垣上の狭間塀や門上から攻撃できるようになっている。また、門の2階には「石落とし」もあり、敵の直上から石を落としたり槍を突くことができるようになっている。門前の石垣は城内で最も巨石が多くみられる場所であり、工事の際に印された「ウ」、「エ」、「ケ」、「シ」などの刻印も確認することができる。

2 追手門から杉ノ段まで

追手門をくぐり左手の石段を登り詰めると杉ノ段に至る。石段は登りにくく下りやすいよう幅が工夫されている。現在は蓋がされている井戸は良質の飲料水を汲めたことから、藩主の居住する二ノ丸御殿まで毎日10時、12時、16時の計3回運ばれていたという。藩主のお国入りや出駕の時には、一族がここまで送迎に向いていた。



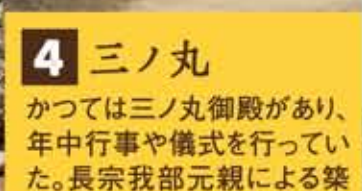
3 鉄門跡と詰門

杉ノ段から右手に石段を登ると打込ハギという手法で築かれた堅牢な石垣が目立つ鉄門跡に至る。当時は門扉に多数の小鉄板が打ち付けられ、門内には小さな枳形が設けられた重要な防衛ポイントであった。再建時に積み直された石垣には、石を割るための楔の跡も残っている。鉄門跡の階段を越えると右手前に三ノ丸、右手に二ノ丸、左手に本丸と天守閣が迫り、真正面には数段の石段越しに黒塗りの詰門がみえる。敵はここで自然に正面の詰門側へと誘導され、石段を登るが最後、三方から矢と鉄砲の嵐に見舞われる。門内は侵入した敵が容易に通抜けられないよう、入口と出口の扉の位置が「筋違い」に設置されており、1階は籠城用の塩を貯蔵する塩蔵になっている。



6 梅ノ段

杉ノ段から左手に進むと、かつての馬場が梅苑となっている(梅ノ段)。ここから西へ下ると「御台所屋敷跡」や城下町民の氏神であり祭礼時に限り庶民の参拝が許された八幡宮跡(現高知八幡宮)の小祠がある。城内には八幡宮のほか諏訪大明神、巖島明神があり、城内三社といわれた。



4 三ノ丸

かつては三ノ丸御殿があり、年中行事や儀式を行っていた。長宗我部元親による築城時の石垣が発掘され、その一部の遺構を見ることができるようになっている。

5 二ノ丸

藩主の暮らす二ノ丸御殿があった。北東には家具櫓や数寄屋櫓などがあり、これらの櫓はその名前が示すように調度や道具類を収納していた。西端には3階建ての乾櫓があり、さながら小天守のようであったといわれる。



7 本丸へ

詰門は本丸と二ノ丸をつなぐ役目を果たしており、藩政時代には「橋廊下」と呼ばれた。2階は家老・中老などの詰所として用いられ、現在の呼称はここからきている。壁には隠し銃眼が設けられている。本丸の入り口には廊下門があり、ここをくぐると本丸に至る。